

介護福祉士を目指す学生の 自尊感情についての研究

A Study on the Self-esteem of Students Seeking to Become Certified Care Workers

檜木 八重子
(Yaeko KASHIKI)

I. はじめに

平成22年10月の国勢調査（抽出速報集計結果平成23年6月29日公表）によると、我が国の総人口は1億2805万6000人その内65歳以上人口は、2929万3000人。約4人に1人が65歳以上の高齢者であり、寿命はまだまだ延び続けている。30年後には、2.7人に1人が65歳以上、そしてその内5人に1人が75歳以上という今までに例を見ない高齢社会を迎えることになる。寿命が延びれば、当然介護の手を必要とする期間も延びることになり、介護の人手は益々必要となる。介護福祉士としての対人援助職は、正に社会から必要とされている職業であり、福祉人材教育の果たす役割は極めて大きなものがある。

目白大学短期大学部生活科学科介護福祉士コース在籍学生は、入学時に「人の役に立つ仕事がしたいから」と、みな口を揃えて唱える。両親家族や進路指導教員の反対を押し切って入学してくる学生も多い。

しかし、そのような強い意志を持って入学したと思われる学生であるにもかかわらず、未知の経験への不安、人間関係の自信のなさや戸惑いなどが重なり、自分に対して自信が持てずに自分には介護は向いていないと挫折をする学生、また、教員から適性が無いと決めつけられる学生も多々出現する。対人関係能力の弱さ、共感性の乏しさそして他者理解力、他者受容力の弱さなど、家庭教育能力低下等により問題処理能力を確立しきれていない学生が増加傾向にある。

対人援助職として、他者理解、自己理解（自己覚知）を深めることは重要な必要要素であり、自分が自分自身をそのまま受け入れること出来るようになることが、他人をそのまま受け入れることにつながるものである。自分の良さに気づき自信を持つことは、他者とも積極的に関わることが出来るようになり、自分に自信を持つことで、困難に出会った場合も積極的に取り組み乗り切る活力が生まれる。また、対人援助の要は個別支援であり、対象者が生きてきた多様な価値観を受け入れることが介護を展開する上で極めて重要となる。

本研究は、短期大学部生活科学科介護福祉コース学生は、「自分は人の役に立つ仕事ができる人間だ」と、自分のことを評価して入学して来るのか、それとも「自分のようなものでも人の役に立つことができるのではないかと」、微かな望みを託して介護の仕事を求めて介護福祉士を希望しているのか。そして入学後は、どのように学生が変化していくのかを自尊感情スケー

ルを使用して入学後2年間に渡って追跡し、分析したものを報告する。

Ⅱ. 調査の概要と結果

1. 対象と方法

目白大学短期大学部生活科学科介護福祉コース21年入学生33名を対象として、1年、2年時に各1回、計2回、延べ66名を対象にアンケート調査を行った。調査期間は、平成21年4月から23年3月である。1年入学時と2年秋学期終了時との自尊感情の変化についてM.ローゼンバーグ（Rosenberg）の自尊感情スケール（4段階）（1982年山本らが翻訳したものに榎木が加工）を使用して1年と2年時に於ける他者理解、自己理解の深まりについての変化について比較検証を行った。

自尊感情とは、自分自身についてどのように感じるのかと言う感じ方であり、自己能力や価値観について評価的な感情感覚のことである。自分自身による自己への尊重や価値を評価するその程度のことを自尊感情としている。自尊感情が低いということは、自己を否定、自己不満足感や自己軽蔑を表しており、自己尊敬を欠いていることも意味する。

1年次は、「キャリアデザインⅠ」の時間を使用して調査用紙を配布して記入を求め、2年次は、「人間の尊厳と自立」の授業時間開始前を利用して調査用紙を配布し、記入を求めた。

調査の目的は2年間の学生変化の比較であるので、1年・2年の2回とも回答を得られた27名を対象として比較検証を行った。検証方法については、個人が特定できないように個人の得点計算はせずに全体内のパーセントで表した。

2. アンケート質問項目

1	私はすべての点で自分に満足している。
2	私はときどき自分はだめだと思うことがある。
3	私は自分にはいくつか見どころがあると思っている。
4	私は友だちがやるのと同じくらいにいろいろなことができる。
5	私にはあまり得意に思えるところがない。
6	私はときどき役に立っていないと感じることがある。
7	私は少なくとも自分がほかの人と同じくらい価値ある人だと思う。
8	もっと自分を尊敬できたらいいと思う。
9	何をやっても失敗するのではないかと感じてしまう。
10	私は自分自身のことを積極的に認めている。

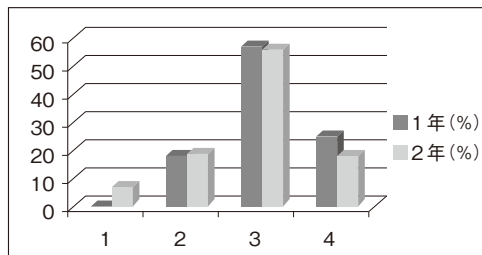
11	私は自分自身のことが好きです。
----	-----------------

- | |
|---|
| ① とてもそう思う ② 少しそう思う ③ あまりそうは思わない
④ 全くそう思わない。の中から自分に当てはまる回答を選択 |
|---|

3. 調査の結果と考察

表1 私はすべての点で自分に満足している。

		n = 27	
		1年(%)	2年(%)
1	とてもそう思う	0	7
2	少しそう思う	18	19
3	あまりそうは思わない	57	56
4	全くそうは思わない	25	18

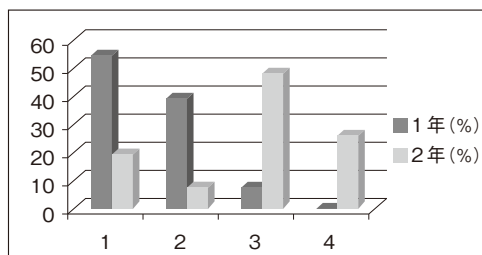


〈図1〉

1年次は、自分に満足している学生は1人も居なかった。「少し満足」18%、「あまり満足していない」57%、「全く満足していない」25%であった。2年生秋になると満足している学生が7%と増加した。また、「少し満足」19%、「あまり満足していない」は56%、「全く満足していない」18%であった。4. 全く満足していないについては、1年次には、クラス全体の25%居たが、2年次には、その内の72%へと減少した。

表2 私はときどき「自分はダメだなあ」と思うことがある。

		n = 27	
		1年(%)	2年(%)
1	とてもそう思う	54	19
2	少しそう思う	39	7
3	あまりそうは思わない	7	48
4	全くそうは思わない	0	26



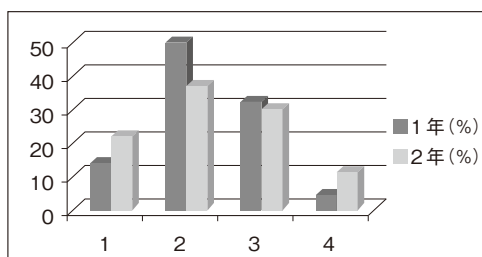
〈図2〉

〈図2〉

「ときどき自分はダメだなあ」と思う学生は、1年次には54%であったが、2年生に成ると、19%と大幅に減少した。「少しダメだなあと思う」は、1年次39%、2年次になって7%へと、大幅に減少している。一方、「あまりダメだなあと思わない」は、1年次の7%から2年生では48%へと約7倍にまで増加した。また、1年次は、「自分はダメだなあと思う」、「少しダメだなあと思う」学生の合計は、全体の93%にもものぼっていた。しかし、2年生に成ると、「自分はダメだなあ」と思う学生と、「少しダメだなあ」と思う学生が、26%居るものの、「あんまりダメだと思わない」「全くダメだと思わない」の合計が74%と、大幅に増加した。社会人学生は、「私たちは、会社の都合でリストラされた、無力の人間です」と言う言葉を度々発していたことを考慮すると、2年間で自分に対する自尊感情が芽生えてきたものと考えられる。

表3 私は自分にはいくつか見どころがある
と思っている

		n = 27	
		1年(%)	2年(%)
1	とてもそう思う	14	22
2	少しそう思う	50	37
3	あまりそうは思わない	32	30
4	全くそうは思わない	4	11

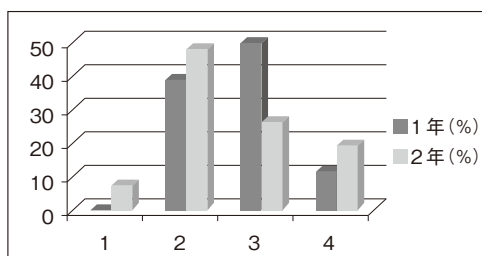


〈図3〉

自分に「いくつか見どころが有ると思う」学生は、1年次は、14%、「少し見どころが有ると思う」50%そして「あんまり見どころがあるは思わない」32%、「全く見どころはない」は4%であった。2年生に成ると、「いくつか見どころが有ると思う」は、約1.6倍の22%に増加した。しかし、「少し見どころが有ると思う」は50%から37%に減少、「あんまり見どころがあるは思わない」30%、「全く見どころはない」は、4%から逆に19%と増加した。しかし、「私は、何の取柄もない人間だ」と思い込んでいたが「社会福祉援助技術Ⅱ」の授業内でグループワークの際に、度々グループの人から「あなたには、このような良いところがある」と指摘を貰って、「私も、見どころが有るんだ」と自分を見直すようになったと期末レポートの記述にあったのが印象的であった。

表4 私は友達がやるのと同じぐらいにいろいろなことが出来る。

		n = 27	
		1年(%)	2年(%)
1	とてもそう思う	0	7
2	少しそう思う	39	48
3	あまりそうは思わない	50	26
4	全くそうは思わない	11	19

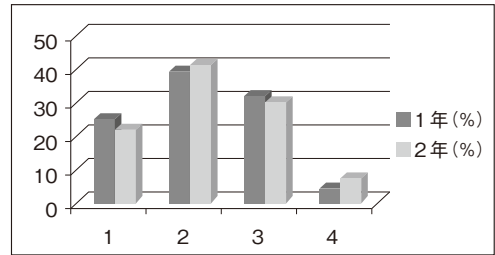


〈図4〉

1年次の調査によると、「他の人と同じぐらいにいろいろできる」については、「できると考えている」学生は0%であり、2年生になると7%に大幅に増加している。また、「少しそう思う」は39%から48%に増加。「あまりできるとは思わない」は1年次50%であったが、約2分の1の26%に大幅に減少している。しかし、なぜか「みんなと同じようなことは全くできない」と思う学生が11%から倍近い19%に増加している。

表5 私にはあまり得意に思えるところがない。

		n = 27	
		1年(%)	2年(%)
1	とてもそう思う	25	22
2	少しそう思う	39	41
3	あまりそうは思わない	32	30
4	全くそうは思わない	4	7



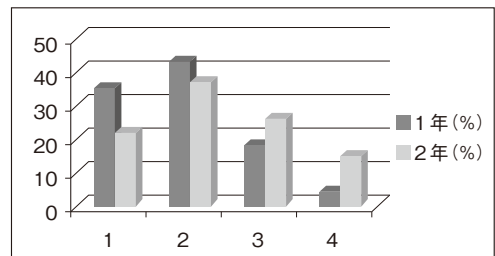
〈図5〉

1年次は、「私には、あまり得意に思えるところはない」との回答が全体の4分の1の25%、「少しそう思う」39%、「少し得意と思えるところがある」32%、4.「得意とするところがある」4%であった。

2年生になると、「私には、あまり得意に思えるところはない」との回答は、少し減少して22%、「少しそう思う」は、1年時よりほんの僅か増加して41%、「少し得意と思えるところがある」30%、「得意とするところがある」は、1年次の約2倍弱の7%となり、自分を認める方向がみえる。

表6 私はときどき「役に立っていないなあ」と感じることがある。

		n = 27	
		1年(%)	2年(%)
1	とてもそう思う	35	22
2	少しそう思う	43	37
3	あまりそうは思わない	18	26
4	全くそうは思わない	4	15



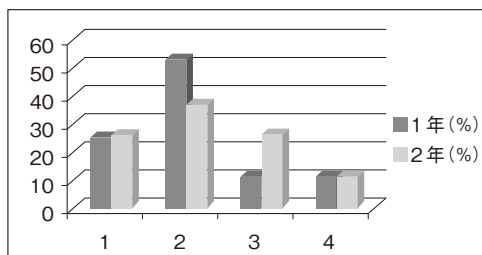
〈図6〉

私は、ときどき「役に立っていないと感じることが有る」1年次35%であったが、2年次には22%に減少した。「少し役に立っていないと感じる」1年43%であったが、2年では、37%に減少した。一方、「あんまり役に立っていないと感じていない」1年18%、2年26%、「役に立っていると思う」は、1年次では4%であったが、2年に成ると1年の3.7倍の15%となった。これは、施設実習などを通して、ご利用者や職員などに助けられながらも人の役に立つ楽しさを感じることが出来た結果と思われる。

表7 私には少なくとも自分がほかの人と同じくらい価値ある人だと思う。

n = 27

		1年(%)	2年(%)
1	とてもそう思う	25	26
2	少しそう思う	53	37
3	あまりそうは思わない	11	26
4	全くそうは思わない	11	11



〈図7〉

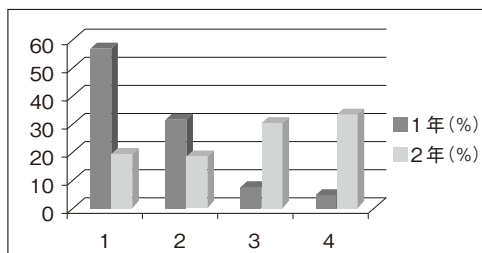
1年次は、4分の1の学生が「ほかの人と同じくらい価値が有る」と考えている。また、「少しそう思う」学生は53%あり、ある・少し有ると答えた学生の合計は78%に上る。価値はあまりない11%そして「全く他の人と同じ価値はない」11%であった。

一方2年生になると「他の人と同じくらい価値がある」と感じている学生は、ほんの僅か1%増えて26%となって居るが、「あまり価値が無い」と感じている学生が大幅に伸びて26%であり、「全く他の人と同じ価値はない」は、1年と同じ11%であった。

表8 もっと自分を尊敬できたらいいなと思う。

n = 27

		1年(%)	2年(%)
1	とてもそう思う	57	19
2	少しそう思う	32	18
3	あまりそうは思わない	7	30
4	全くそうは思わない	4	33



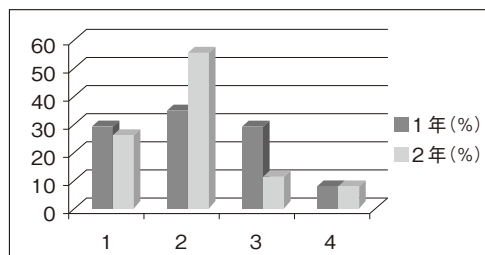
〈図8〉

「自分をもっと尊敬できたら」と「強く願う」学生は、1年次には57%、2年に成ると19%、約3分の1に減少した。「少し尊敬できたらと思う」は、32%から18%へ、これは約2分の1強に減少した。

一方、自分をもっと「尊敬できたら良い」という思いがあまりない学生は、1年次7%、2年生になると30%、「全く願わない」学生は、1年4%、2年33%であった。これは、自分のことを尊敬してないから尊敬できるようになりたい願いと、既に尊敬しているからその必要が無い場合に分かれるので解釈が難しい尺度である。しかし、この調査結果の数字を見ると、短期大学部介護コース学生の資質からして自尊感情が既に働いていると考えた方が妥当だと考える。

表9 何をやっても失敗するのではないかと
 思ってしまう。

		n = 27	
		1年(%)	2年(%)
1	とてもそう思う	29	26
2	少しそう思う	35	56
3	あまりそうは思わない	29	11
4	全くそうは思わない	7	7



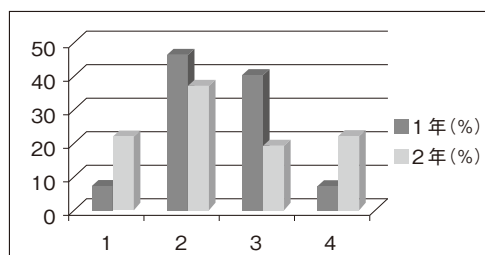
〈図9〉

何をやっても失敗するのではないかと思ってしまう。については、「とてもそう思う」は、1年次29%、2年生になるとほんの僅か減少して26%、「少しそう思う」1年35%、2年生56%、「あんまり失敗するとは思わない」は、1年29%、2年生になつては、減少して3分の1弱の11%、「何をやっても失敗するとは全く思わない」は、1年次、2年生ともに7%だった。

何をやっても失敗するのではないかと不安に思うことは、特に新しいことを初めて手掛ける際にはよく抱く思いである。

表10 私は自分自身のことを積極的に認めている。

		n = 27	
		1年(%)	2年(%)
1	とてもそう思う	7	22
2	少しそう思う	46	37
3	あまりそうは思わない	40	19
4	全くそうは思わない	7	22

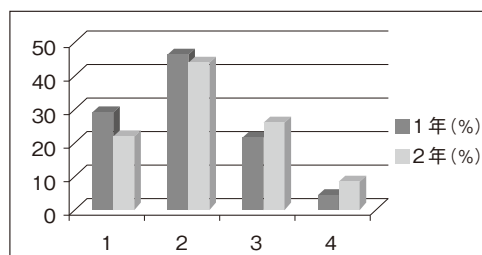


〈図10〉

「自分自身を積極的に認めている学生」は、1年次には、7%、「少し認めている」46%、「あまり認めていない」40%、「全く認めていない」7%であったが、2年生になると「積極的に認めている」は、1年生時の3倍強の22%になった。「少し認めている」37%、「あまり認めていない」19%、「全く認めていない」22%であった。

表11 私は自分自身のことが好きです。

		n = 27	
		1年(%)	2年(%)
1	とてもそう思う	29	22
2	少しそう思う	46	44
3	あまりそうは思わない	21	26
4	全くそうは思わない	4	8



〈図11〉

「自分自身のことをとても好きと思う」「少し好きと思う」を合わせると、1年2年次の合計で200分の141、「あまり好きとは思えない」「全く好きではない」の合計200分の59であった。21年度入学生は、社会人学生を初めて受け入れたということもあり、また、急に学生数が増えたということも原因しているのか、1年次に度々トラブルが発生した。しかし、このトラブルをどうやら回避できたことは、学生が自分自身のことが好きだったということに起因し、この数字に表れていると考えられる。

4. 調査結果の総括

調査結果を総括すると、入学時には自分に自信が無く、自分はダメだと思う学生が93%であり、自分はダメだと思わない学生は居ない。この結果一つを見ても「自分は人の役に立つ仕事ができる有能な人間だと自分のことを評価して入学して来る学生は居ない」という結論になってしまう。その他は、もっと自分を尊敬できると良いと思う学生が、89%、自分に満足できていない学生が82%、人の役に立っていないと感じる学生が78%、何をやっても失敗するのではという不安を持つ学生が64%と並ぶ。しかし、2年後には、自分はダメだと思う学生は、26%に減り、ダメだと思わない学生が74%へと上昇している。また、私は役に立っていると感じている学生が41%にも達している。

今回の調査では、生活体験不足や成功体験の脆弱さに加えて高齢者や障害者との生活体験の乏しさの中でありながら、2年間で自分を価値ある人間だと思える自己理解、また、対象者もそこに居て下さるだけで価値が有るのだという他者理解が深まったことが示唆された。

Ⅲ. まとめ

日本には、「奥ゆかしい」という言葉が有るように、一般的に日本人は自分そして自分を取り巻く家族等に価値観を見つけて言葉で表現することは少ない。言い換えれば、誉めることが苦手である。

「福祉は、介護は、相手の良いところ探し」を大きなテーマとして、クラスの友人・家族・実習先のご利用者などすべての人の良いところを探し出して、好きになることの実践を行ってきた。実習先では、「介護の素敵なお仕事探し」を行い、記録の提出を課題としている。

介護福祉士は、対人援助の専門職であり、自分をどのように捉えているかは明確でなくてはならない。自尊感情が低い場合は、一般的に他者との人間関係がうまくつけれないといわれ、対人関係に関する問題を抱えることが多いとされている。また、自尊感情の高い人は、内的な強さを持ち、自己についての強い関心から困難も乗り越えることができると言われている。

調査対象の学生には、2年春学期に「社会福祉援助技術Ⅱ」で行う自己覚知に係る演習内で、あくまでも自分を知る（自己覚知）演習の一つとしてブラマー・デボラの『自己肯定・自尊の感情をはぐくむ援助技法』のワークブックの一部を取り上げた。また、「社会福祉援助技術Ⅱ」で取り上げた各種の演習は、学生にとっては自分を見つめ、見つめ直す学習体験であったと、多くの学生のリアクションペーパーから覗くことが出来た。「私は、何のとりえもない人間だ」と思い込んでいたが、「社会福祉援助技術Ⅱ」授業内でのグループワークの際に、グループの人達から度々「あなたは、このような良いところがある」と指摘をもらって「私も、見どころが有るのだ」と、自分を見直すようになったと自己覚知のレポートへの記述があった。これは、集団の力が大きなプラスとなって表れた結果であると考えている。

今回の調査では、生活体験不足や成功体験の脆弱さに加えて高齢者や障害者との生活体験の乏しさの中ではあるが、2年間で自分を価値ある人間だと思える自己理解、また、対象者もそこに居て下さるだけで価値が有るのだという他者理解が深まったことが示唆された。

自己理解や他者理解が出来なくては、他者支援は難しい。対人援助職として、他者理解、自己理解（自己覚知）を深めることは重要な必要要素であり、自分が自分自身をそのまま受け入れること出来るようになることが、他人をそのまま受け入れることにつながるものである。自分の良さに気付き自信を持つことは、他者とも積極的にかかわることが出来るようになり、自分に自信を持つことで、困難に出会った場合も積極的に取り組み乗り越える活力が生まれる。また、対人援助の要は個別支援であり、対象者が生きてきた多様な価値観を受け入れることが介護を展開するうえで極めて重要となる。福祉人材教育の果たす役割は極めて大きいものがある。2年間でこのような成長が有るのであるから、せつかく縁があり、人の役に立つ仕事がしたいと志を立てて入学してきた学生を、中途退学などで失うことが無いようにしてはならない。介護技術も重要ではあるが、まず、1年春学期から、対人援助職としての基本である感謝の気持ちや相手を思いやる心の優しさ、そして自己を尊敬し自分は価値ある存在だと理解し、他者を理解する力を取得させるカリキュラムを組むことが求められよう。

介護福祉コース入学者数と退学者の推移

	入学数	中退数
H19	20	2 (2)
H20	13	3 (2)
H21	34	4 (2)
H22	29	1 (1)
H23	12	

() 内は、1年春学期退学者

【参考文献】

- (1) ミルトン・メイヤロフ 田村 真訳『ケアの本質—生きることの意義—』ゆみる出版 1987
- (2) グロリア・スタイネム 道下 国子訳『本当の自分を求めて 自尊心と愛の革命』中央公論社 1994
- (3) これからの社会福祉・介護福祉 月刊福祉 2月号 2007
- (4) 遠藤 辰夫、井上祥二、蘭千壽編『セルフ・エステティームの心理学～自己価値の探求～』ナカニシヤ出版 1992
- (5) プラマー・デボラ 岡本正子訳『自己肯定・自尊の感情をはぐくむ援助技法』生活書院 2009